



四、レポート ——を書く。 ——を討議する。

蘭部英夫
(全障研副委員長)

レポート (report) は「re- (元へ)」と「port (運ぶ)」が合わさった言葉で、「運び戻す」というような意味合いから「報告」となりました。学生が課題として提出する「レポート」に相当する英語は「paper」または「term paper」だそうです。障害者権利条約の批准国が国連に提出義務のある締約国報告は「カントリーレポート」と言われます。

ところで全障研の場合、「レポート」はとびきり大切なものとして位置づけられます。

51回目をむかえる全国大会の分科会は、参加者からの「レポート」による討論が中心です。全障研は「実践から理論へ。理論から実践へ」と発達保障の研究運動をすすめきました。それとのとりくみの教訓や課題を学びあい、次回の大会までに深めていく課題を確認し、現場にもどって実践や研究をさらに深めきました。

また、大会レポートは実践や研究、運動だけでなく、それぞれの生活の体験談、行政や制度への不



▲全障研全国大会の分科会

満や要望、意見など自分の身のまわりのできごとも大切なレポートとして討議してきました。みんなで話しあうなかで権利保障の道すじは明らかになっていくのです。レポート作成にむけては、一つひとつの事実がどういう意味をもつっているのかなど、集団で話しあいながらとりくみの成果や課題などをまとめていきます。

日々のとりくみのレポートが、なんでも受けとめられ、優しく厳しくもある分科会集団による討議のなかでぐんと深まるとき、なんとも言えないエネルギーがわいてきます。そしてまた次のとりくみに発展していくのです。